The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	〈翻訳〉『まぼろしの馬』 Isak Dinesen著
Author(s)	田辺, 欧
Citation	IDUN ー北欧研究ー. 2017, 22, p. 175-193
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60750
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『まぼろしの馬』[1]

Isak Dinesen[2]著・田辺　欧訳

小さな女の子が大きな家で病の床に就いていた．女の子は，快方に向かっていたが，急にぶり返して，今後は回復するのを拒む風に見えた．

町から呼ばれた高名の医師は，病気は全快した，そろそろベッドから離れるはずだと言った．だがその子は，ぬいぐるみの人形みたいにベッドでだらりと力なく横たわっていた．人が話しかけても目を瞑ったままだったが，誰も見ている者がいないと思ったときは目を開けて，悲しげに宙を見つめた．そして大粒の涙が長いまつ毛に滴るのだった．食べようとせず，話そうとせず，子守娘が足で立たせようとすると，痛がって喚いた．

少女は6歳，オイノーネ[3]という洗礼名を授かっていたが，普段はノニーと呼ばれており，青い目，ブルネットの巻き毛の可愛い子だった．一人っ娘で，生来甘やかされて育ち，彼女の臥せっているベッドはありとあらゆる上等なおもちゃでとり囲まれていた．

少女が臥せっている家は，大きな庭園の中にあって，築200年の厳めしくて気品のある灰色の建物だった．家は何代も同じ一族が所有しており，そこには数多のただならぬ歴史が存在していた．居間では，かつて一人の父親がファロ[4]の賭けで娘を失ったことがあったし，広間では生死をかけた決闘がなされたこともあった．そして100年前には，この家の若い奥様が家の宝石類をごっそりと持ち出して，ハンサムな馬丁と出奔した．

ノニーの母親は，この家を歳とった叔母から相続し，丸1年その連れ合いとともに楽しみながら理想のモダンな住居へと変えていった．バスルームは話題にものぼるもので，各居間にはラジオが置かれ，大きな古い厩舎は燦然と輝くガレージとなっていた．

---

1 原題は *Spøgelseshestene*．本作は最初，1950年にIngeborg Bramsによる朗読でDanmarks Radioにてラジオ放送された．翌年1951年に作者Isak Dinesen自らによって英語版 ”The Ghost Horses”がアメリカの *Ladies' Home Journal* に掲載され，その後デンマーク語版は作者校閲のもと，秘書Clara Selborn訳によって1955年に出版された．本稿の邦訳はデンマーク語版Isak Dinesen. *Spøgelseshestene*. (1955). Fremad を使用した．

2 Isak Dinesen は本名Karen Blixen の男性名による筆名であり，邦訳ではイサク・ディネセン，またはイサク・ディーネセンと表記されることが多いが，デンマーク語の発音に準拠すれば，イサク・ディーネスンとすべきである．

3 ギリシャ神話において予言力と薬草に詳しいニンフから由来する女性名

4 ファロ（Faro）とは賭けトランプの一種

医者は，ノニーの母親に言った．

「我々は今，極めて稀有な場面に向き合っています．生と死の意図的な選択が我々の目の前で起ころうとしているのです．その選択を為すのが 6 歳の娘とは! 我々は，ノニーが尋常ならざる意志を持ったお嬢さんであることを忘れてはなりません」

「まあ，先生，何のことを仰っているのですか？」と母親が尋ねた．

「私の考えていることをご説明しましょう」と医者．「子供の世界はしばしば一つの小さな太陽系です．中心には一人だけ，魅惑的な人物が存在します．その人物とは幼い娘の若く美しい母親であってくれれば良いのでしょう．ノニーは，母親を 3 週間の間，完全に独り占めしてきたのですが，この幸せな状況がいつの日か終わるのではないかということに，今や堪えられないのです．彼女は，いつまでも自分があなたの人生で主人公を演じ続けられるように，病気にしがみついています．そうです，お嬢さんは母親が自分の不在に気づいて嘆くなら，主人公で居続けられると思い，死を覚悟することも厭わないでしょう」

「でも，私はどうすればいいのですか？」若く美しい母親はひどく動揺して大声をだした．「愛する者を不幸にさせるということは，いつだってそうじゃありませんこと？」と彼女は目に涙を溜めてつけ加えた．

「どうなればよいか申しましょう」と医者は答えた．「旅に立たれることです．ご主人は，何度かフランスへ 2 週間，車で旅行されるご計画だと仰っていました．もし私の忠告に従われるのであれば，明日にもこの旅行に出発されるのがよろしい」

彼女は，医者の顔を見つめ，それから窓の外へと目を移した．

「あなたは，お子さんを最高の世話人たちに任せられるのですよ」と医者は言った．「アンダソン嬢は，責任感の強い女性ですし，ブラウン嬢はベテランの看護婦．それに，あの若いスウェーデン人の子守りは，ノニーを大変慕っているようですからね．私だって，この件には十分に配慮しますし，出来る限り患者の看護に当たるつもりですよ」と彼は言い切った．

「ええそうですね，おそらく」とノニーの母親はゆっくりと言った．「ええ，おそらく，離れるのがいいのかもしれませんわね」

「我々四人は」と医者はちょっと笑みを浮かべて言った．「共同作戦を張って，毎日お母さんのことをノニーと語りましょう．我々はノニーに，君がすっかり元気になって初めてお母さんが戻って来るのだということを理解させましょう．そしてそのとき直ちにあなたもその場にお立ちになるのです．そして彼女とあなたは再び一緒になる，もうずっと！ そうすれば我らが幼い患者は死ぬことを目標とはせず，元気になることに全力を尽くすことでしょう」

「実は，ちょうどパリの弟に来てくれるようにと電報を打ったばかりですの」とノニーの母親は言った.「弟は，明日にもやって来ることになっていますわ」

「あなたの弟さん，画家の？」と医者が尋ねた.「ノニーをモデルに素晴らしい絵を描いたあのチャーミングで一風変わったところのある若い男性が来られるというのですか？　それに越したことはない!　彼なら毎日ノニーにあなたの旅行の最新情報を伝えることも，旅のイラストだって描くことも出来るでしょう」

こうしてノニーの母親は，新調の大きな車で夫とフランスへと旅立って行った.

さて，外国旅行途上の母親は，ドーヴァーで弟と顔を合わせることになった.三人で，海峡の眺めが美しいホテルで昼食を共にしたが，夫のピーターが食後に車の点検に出て行くと，二人の姉弟はコーヒーを飲んだりタバコを吸ったりしながらたっぷりと時間を過ごした.

弟は，姉の 2 つ下で，このとき 23 歳だった．二人は，いつもとりわけ仲が良かった．セドリックは，最初は画家になるつもりだと言って，その後は実際にそれなりにひとかどの名前を挙げることで家族を驚かせた．彼は，パリで自分が高く評価している芸術家たちのサークルに属していたが，一方で彼自身はまことに節度のある人間だった．瞳の美しい細身な若者で，服装にはややかまわないところがあったが，礼儀正しさと優しい立ち振る舞い，そして若者の特徴ともいえる精神的な平衡感覚が身についており，それは一族が何代にも亘って極めて高いか低いかは別として全く同じ経済的水準の中で暮らしてきたことを示していた.

アナベルは弟に，子供の世界はしばしば一つの小さな太陽系で，中心には一人だけ魅惑的な人物が存在すること，そして自分はノニーの命を救うためにフランスへ向かうところであるということを説明した．こうしてセドリックは，毎日ノニーに母親のことを語り，ノニーがすっかり元気になったら母親は戻ってきて，それからはノニーのところにずっといる！とノニーに保証することを姉に約束させられた．そして日々忘れずにノニーの回復の進捗状況について，報告書を書き付けられたさきざきのフランスの住所へ送ることも約束せねばならなかった.セドリックは，それらすべてを承知した.

「でも姉さんが僕に来るようにと電報を打ってきたのはそんなことじゃないんだろ」とセドリックが言った.

「ええ」とアナベル.「そんなことじゃないわ」彼女はちょっと黙してから言った.「あなたにアドバイスしてほしいことがあるの」彼女にはこれまで何度も彼にアドバイスを頼みたいことがあった.

「僕に出来ることはやるさ」と彼は言った.

「そう，お願いよ」とアナベル.「でもね，まずは私のことをわかってくれなきゃ.実はピーターと私がここ数年間で莫大なお金を使い果たしてきたってこと.

俗に言う身分不相応な暮らしをしてきたってこと」

「えっ，姉さんたちが？」セドリックが驚いて大声を上げた．

「お願いだから説教はいやよ」とアナベル．「身分不相応な暮らしをするなんて途方もなく嫌なことよ，そうでしょ．そんなこと，もう耐えられない．あなただって，そうでしょ」

「そうだ，僕だって我慢できないよ」と，パリで自ら質実剛健な暮らしをしてきたセドリックは言った．

「思った通りだわ」と姉が言った．「でもね，つい最近のことだけど，またとないチャンスを手にすることになったの．ピーターが常々まともな仕事を得て，自分に能力があることを示せるようになりたいと心底願っていたことは知っているでしょ．そうしたらまさに突然，国の大財政家がピーターに自分の会社に来ないかと申し出てきたの．凄い地位なのよ，すべての人を驚かせると思う．でもね，その財政家自身にはピーターの稀有な才能が見えていたわけよね．またとないチャンスよ」

「国の大財政家って誰だい？」セドリックがゆっくりと言った．

「モーリス・メンドサ卿よ」アナベルが短く言った．また続けて「これ，またとないチャンスでしょ，そう思わない？」と自信なげに言った．

「思うよ，そう言ってもいいだろうね」と弟．

「そうよ，そう言ってもいいでしょ」と姉が繰り返した，「でも，私のことは？」

「そうだ，姉さんはどうなるんだ？」と彼が言った．

「お願い，セドリック」彼女が大声を出した．「完璧なおバカさんはよしてよ．モーリス卿は，私のことを褒め称えるの」

「我々みんなと同じようにだろ」とセドリック．

「違うわ」と彼女．アナベルは，タバコを吸い終わって言った．「みんなとは違うの」

「それに，ピーターはいつも，姉さんが褒め称えられるのを喜んでいるじゃないか」と彼が言った．

「違うのよ」彼女はまた言った．「夫は，全部知ったら喜ばないと思う」

「それで，姉さん自身はどう思っているの？」と彼は問うた．

「ええ，セドリック」彼女は言った．「そのことなのよ．私は，ピーターのことが大好きよ．この 7 年間だって，大好きだった．だから，彼のこと裏も表もわかっているつもり．

でも，モーリス卿って」彼女は言った，「私，あの人のことちっともわかっていないの．実際，あの人がしていることのすべてに謎めいたものがあるのよ．彼は，ほかの人たちと同じ尺度で言えるお金持ちじゃないわ．彼は，信じられない

くらいのお金持ち，人が謎だって言うのももっともなことだわ，サクランボのようなルビーやエメラルドやブドウのようなサファイアが隠されている，まさにアラジンの洞窟よ！私，アラビアンナイトの話を思い出したわ，だって彼，宝石類にじつに素晴らしい鑑識眼を持っているんですもの．ああ，セドリック！ 先祖のアナベル祖母様が馬丁と出奔したときに，家の宝石類をそのままにしておいてくれていたらなあと，どれほど思うことか！」

「たしかに」とセドリックはゆっくりと言った.「ロマンチックな恋物語には，よくこうしたうんざりすることがあるなあ」

「ノニーが病に伏す前の晩」とアナベルは続けた.「私たち，モーリス卿のところで晩餐をしたの．そこで彼がオランダで求めたという大きなルビー，カボションカットの，本当に信じられないような色をしたルビーを私に見せたのよ，セドリック．彼は私に尋ねたわ．もしピーターと自分が手を組むことになったら，そのルビーをブレスレットに嵌めてプレゼントしてもいいかって．彼が言うには，我々の協定の赤い封印として．そうしたらノニーが病気になったものだから，私，長い間誰にも会っていないのよ．やっとこれからの 2 週間私たちにフランスで考えたり決心したりする時間が出来たわけ. そう, そういうこと. さあどうしたら良いか私にアドバイスしてくれる？」

「僕にも，これから 2 週間考えたり決めたりする時間をくれるかな？」とセドリックは言った.

彼女は，しばし黙った.「そうね」と彼女は言った.

会話がここまできたとき二人は，上等の洋服を着て，日に焼けて，いつもと変わらず元気な様子でピーターがテーブルの方へ戻って来るのを見て，話題を変えた.

「ねえ」とアナベルは言った,「不思議なのよ．ノニーは病気になった初めの頃ずっと，馬のことを，いつも馬のことばかり話していたのよ．競馬や狩猟や厩舎作業のこと，馬車用や乗馬用の馬のことなど．彼女，一頭の馬もほとんど見ことがなかったというのによ．彼女が馬のことを話し続けるので，ピーターが見事な大きな機械仕掛けの馬を買ってあげたの，本物の馬の毛で出来た鬣（たてがみ）や尻尾がついた，嘶（いなな）くことも出来る馬よ．それは，本当に細かいところまで馬そっくりだったわ．でもノニーは見向きもしなかったの」

こうして 3 人は別れ，それぞれの道を進んだ.

セドリックは，田舎で静かな時間を楽しみにしていた．というのも大きな新しい絵の構想があり，一人になることが不可欠だったのだ.

彼は，これまで姉が不在のときに，姉の家に行ったことはなかった．彼女がいないと，ある意味それは別の家だったが．そこで歩き回ったり，その独特の空気

を吸い込んだりしていると，逆説的な意味で，気楽にしておられる場所，そう自分自身の家となるのだった.「もし，これが本当に僕の家だったら」と彼は考えた.「これをあの歳とったデボラ叔母さんの時代のままにしておいたことだろう．もし，僕がその頃からここに住んでいたら，ゾファニー[5] のような絵を描いていたことだろう」

彼は，幅広の階段をノニーの部屋へと上って行ったが，自分の記憶より彼女がはるかに魅力的だったことに胸を打たれた．だが，その小さな花の顔（かんばせ）に見られるこの厳しく，やつれた，そして絶望に満ちた表情は何を言わんとしているのだろう？ それは彼に，絵の一つが構図あるいは色でしくじったときのような，そう，指に刺さった棘のような苦痛の思いを起こさせた.

彼は，姉の指示に忠実に従って，ノニーに母親のことを話し，そのフランス大旅行を説明したばかりか，紙と色鉛筆の助けを借りてそれに生き生きとした生命を与えようともした．ノニーは，彼の言うことを聞いていたが，わずかな興味の気配さえ見せず，うわべの小馬鹿にしたような視線を絵に向けていただけだった．本物の馬の毛の尻尾と鬣を持った例の感動的な機械仕掛けの馬は，彼女のベッドの傍らに立っていた．彼は，それに賛美の念を表明した．彼女の小さな顔は，いよいよ悲劇的なものになった.

「せめて僕が多少なりとも芸術家という名に恥じない者なら，この強情な『子供の肖像画』というものを描けるに違いない」と彼は独り言を呟いた.

彼は，彼女に問いかけた.「起きられるようになったら，何をして遊ぼうか，ノニー？」

初めての答えが返ってきた．ちょっと間を置いて言った.「遊べない」.

「どうして？」彼が尋ねた.

再び沈黙があり，それから前より一層強い侮蔑を込めて同じ答えが返ってきた.「あたしたち遊べないわ，あなたとあたしじゃ」

彼は，口を開く前にちょっと考えてから言った.「そう，君と僕ならダメか．じゃあ，誰となら遊べるの？」

彼女が答えた.「ビリー」

彼は，彼女を追い詰めるつもりはなかったので，それで満足することにした.

医者がピカピカの車でやって来て，患者を診察し，ベッドから離れたかどうか尋ねた．看護婦が頭を振ると，医者は深刻な状態になりつつあること，次の往診までに何としても子供を立たせるようにしなければいけないと看護婦に言い含めた．こうした注意を与えると，医者は去って行った.

セドリックは，ノニーに言った.「ベッドから出て，ビリーと遊べるなら，立

---

[5] Zoffanny, Johann (1733-1810) ドイツ生まれの英国画家．肖像画・団欒画を得意とした.

ち上がるよね」

「そうね」とノニー.

「でも，どうしてなんだろう？」と彼はもう一度言った.「君が立てないのは？」

子供は，顔に憤慨の色をなした.

「わかっているくせに」と彼女.

「僕は，長い間パリにいたんだよ，ノニー」と彼.「その間に知らないことが沢山起こった．それを僕に話してくれないかなあ？」

「ビリーが死んだから」とノニー.

セドリックは自分が，これから描こうとしている大きな絵のことよりずっと強くノニーのことを考えているのを感じ始めていた. 彼は, この使命を果たすのに, アンダソン嬢やブラウン嬢の助けを当てに出来るとは思わなかったので，若いスウェーデン人の子守のイングリッドに目を向けた．イングリッド自身，彼の絵描き心を大いにくすぐった．彼女が，白いカラーと帽子をつけると，古いオランダの絵に描かれた少女に似ていたからだ．そこで彼は，イングリッドを驚かせはしたが，彼女の小部屋を訪ね，事情を聞くことにした．二人は，まずノニーの病気を詳細に振り返り，母親が帰ってくるまでに彼女を元気にしなければいけないということで意見が一致した.

「ところで，教えてほしいのですが」とセドリックは言った.「ビリーって，誰なのですか？」

イングリッドは，真っ青になり，不安そうに悲しげに彼を見つめて言った.「ああ，セドリックさま」

「そう，イングリッドさん，きっとあなたならおわかりでしょ．それがわからないと，ノニーのことはうまくいかないんですよ」

「私，思っていましたの」とイングリッドは言って，うつむいた.「絶対誰にも知ってほしくないって」

「どうして絶対誰にも知られてはいけないのでしょう？」と彼が尋ねた.

「ビリーが死んだからですわ」とイングリッドが言った.

「ええ，それはわかっていますよ」とセドリック.「ビリーが死んだのはとても残念なことです. でも, ビリーのことでは, それ以上のことがあるに違いない. それを僕に話してくれませんか，ひとには言いませんから」

イングリッドは深呼吸した.「あなたにお話し出来るなんて本当に嬉しいですわ, セドリックさま」と彼女は言った.「私, 何もかもがずっと悲しかったんです」

彼女は，経緯を話し始めた．真剣に，ときに短い間を置いて，しっかりと約束を守らせようとでもするかのように彼の顔を覗き込んだ.

ビリーは，ピーヴィー老夫人の孫だった．ピーヴィー老夫人とは誰かって？

ピーヴィー夫人は，老御者の後家で，その老御者は今はガレージになっている厩舎の上の小さな部屋に住んでいた．彼の死後，彼女はそこに住み続けることを許されたのだった．

セドリック氏は，たしかピーヴィー夫人には会ったことがなかったのではなかろうか？　そうだろう．ピーヴィー夫人が足を痛め，階段の上り下りが困難になったのがことの始まりだった．彼女とイングリッドはたいそう仲の良い友達になった．夫人がイングリッド同様，田舎の出で，彼女の父親は馬を飼っていた．イングリッドの父親と同じように．それで，二人は沢山の共通する関心事を持っていた．イングリッドは，家で何度となくピーヴィー夫人の手助けをした．彼女は，そのことを誰にも話したことがなかった．そんなことで自分の時間を費やすなどもってのほかだったからだ．

「あなたとピーヴィー夫人，どちらにとっても楽しかったんですね」とセドリックが言った．

「ええ，夫人も私も楽しかったですわ」とイングリッドが言った．

ピーヴィー夫人には一人の息子がいた．大きな競馬厩舎で働き，結婚して７人の子を抱えていた．その息子が再婚したので，一番下の子のことで新しい妻に負担をかけるわけにいかず，ピーヴィーばあさんがその子を引き取ったのだった．その少年の長兄が少年を連れてここまでやって来た．彼自身，競馬厩舎で働いていたが，品のある魅力的な青年だった．セドリックは自分に問うたのだった．この老夫人と若い女性が別して共有する関心事とはこの端正で魅力的な青年のことではなかったろうか，と．そして小さな男の子の方は古い厩舎の上で祖母と暮らすことになった．

「そうです，それがビリーです，セドリックさま」とイングリッドが言った．

ビリーは，ノニーの１つ年上で，ハンサムで利口な少年だった．だが，彼は聾唖だった．

時々，アンダソン嬢がイングリッドに，ノニーを連れて散歩に行くように指示をしたときなど，二人は散歩に行くかわりに厩舎の階段を上ってピーヴィー夫人を訪ねた．こうしてイングリッドは彼女の話し相手になってひとときを過ごし，彼女のために繕い物をしてやった．その間，ノニーとビリーはピーヴィー夫人の居間と食堂と境を接する大きな馬具部屋に入って遊んだ．このように４人みんなが素敵な時間を過ごしたのだ．ノニーは，その歳にしては並外れて分別のある娘で，こういうことを他人に一言も喋らなかった．

「それじゃあ，何もまずいことなど無かったのでは？」とセドリックが言った．

「いえ，セドリックさま，それがあったのです」とイングリッド．「ノニーに麻疹をうつしたのがビリーでしたから」

イングリッドは，苦しげに，膝の上で両手をよじった．「そして，ノニーが回復しかけた丁度そのとき」と彼女は続けた，「ビリーが死んだのです．ノニーが再び病気になったのは，ビリーが死んだと聞いたその時でした」

「どうやってノニーはそのことわかったのですか？」とセドリックが訊いた．

ノニーは，ビリーが死んだことをイングリッドから知らされたのだった．イングリッドは，ピーヴィー夫人を訪ねて行き，二人でビリーの死に涙を流したのだが，彼女が戻ったとき，なぜ泣いていたのかとノニーに訊かれて，黙り通すことが出来なかったのだ．真夜中に医者を呼びにやらなければならなかった．ノニーがほんものの病気になり，うわごとを言っている間，イングリッドは，ノニーが話してしまうのではないか，ピーヴィー老夫人が追放されるのではないか，という恐怖に動転していた．だが，ノニーはしっかりしており，余計なことは語らなかった．

「姉が，ノニーがしきりに馬のことを喋ったと話していたのですが」とセドリックは言った．

そう，初めのうち彼女は馬のことを話した．馬具部屋には馬の絵が何列も掛かっていた．ビリーは，ノニーにそれらの名前をすべて教えた．

「彼には，どうしてそんなことが出来たのだろう？」とセドリックが言った．「あなたは彼が聾唖だったと言ったばかりじゃないですか」

このことは，明らかにイングリッドにはことさら気にすべきこととは思われていなかったようだが，それについて何らの説明も出来なかった．ノニーとビリーは，馬具部屋で遊ぶときはいつも二人だけでいたがった．そう，彼らは扉に錠をかけて，中で全く音をたてずに遊んだのだった．不思議なことに思えるけれど，ビリーは話すことができた．彼には読唇術が身についていたし，きっとそれを，イングリッドが思うに，ノニーにも教えていたに違いなかった．ノニーがイングリッドに「さあ，あんたにいいことを話してあげる」と言って唇を動かすだけで，イングリッドが理解できないでいると，他人の不幸を喜ぶような意地の悪い顔をして見せたからだ．そして，ノニーが病気になってからのこと，時折彼女は寝たまま一人笑いをしていたが，ついにイングリッドに，ビリーと自分は一緒に遊べるような何頭かの美しい馬を持っていたと穏やかに打ち明けた．

「僕は，いよいよビリーのことでノニーと話さなければ」と一呼吸おいてセドリックが言った．

「それがいいことだと思われますか，セドリックさま？」とイングリッド．

「ええ，大方そう思ってますよ」とセドリックは言った．「医者は私の姉に，子供の世界の中心には一人だけ魅惑的な人物が存在する，と言ったんです．医者は，ノニーにとっては母親だと考えていたのですよ．でも，今の僕は，それはビリー

だったとわかりました」

セドリックは，毎日姉に葉書を送っていた．やっと一通姉の方から郵便が届いた．フランスは素晴らしい，ピーターとの旅は素晴らしい，ノニーのところへ帰ることがとても嬉しい，けれど時々は，帰らなくてよかったなら，と思うことがあると．よろしく，そしてノニーにキスを，と書いてあった．

セドリックはノニーに言った．「僕が君だったら，こんな馬は捨ててしまうよ」二人は揃って，ベッドの傍らの高価なおもちゃの馬を軽蔑の目で眺めた．

セドリックが続けた．「ほかのものにそっくりなものなんて，ものすごくつまらない，あっごめんよ，ノニー」

ノニーは，彼に目を向けたが，なおも不信感いっぱいで，応じなかった．

「唯一ほんとうに本当のもの」と彼は考え込むように言った，「それは，自らを創り，ほかのものに似せようとはしないものなんだ．パリの家には，自らを創りあげるのに僕が縁（よすが）となった“ほんとうに本当のもの”が沢山ある── 花，鳥，虹，山，不幸せで川へ飛び込む女の人．それらはみなどこまでも，自分から歌い，香り，川へ飛び込んでいる，だから僕は時々それらに驚かされるのだけれど ── とても美しい，ノニー，とっても美しいんだよ！ そこには外から入って来る，観客というものも存在するんだ，これらをずっと見ていて，世の中のどんなものにも似ていないと言うんだ」

しばしの沈黙のあと，ノニーが尋ねた．「それらは何から創られるの」

「普通，創られるものを見つけるんだよ」とセドリックは言った，「人が何も無いと思っているところでも，ノニー．でも僕は，それを見つける手助けもするんだ．君はそうしないの？」

蒼白い，一瞬の微笑み，彼がやっと見た初めての笑み，それが彼女の顔に一条の光を添えた．「そうする」と彼女は言った．

彼は，しばし待った．

「馬のことだけど」彼は話の穂を継いだ．「ほんとうに本当の馬．僕が想像するに，ビリーはそんな馬にどんなことでもさせることが出来たんじゃないかと思うんだけれど，違うかい？」

ノニーは，彼の顔を見上げた，これまで一度も無かったことだった．彼女の顔つきは真剣で誇らしげで，もはや非友好的なところはなかった．

「ビリーは，馬が出来ることは何でもあたしに説明出来たの」と彼女．

「そうか，なるほど」と彼．「ビリーはほかの少年のようには喋らなかったからね」

彼女は，何かもっと話したそうだったが，そこでまた口をぴたりと噤んだ．

「ねえ，ノニー，とりあえずはずっと元気でいてほしい」と彼は言った．「僕

は，君のお母さんが僕に置いて行った車でひとっ走りしてくるよ．本当はつまらないけれどね．だって，ビリーの馬のことを思ったら，車は信じられないくらいノロノロしていると思うからね」

「また戻ってきてくれるわね，ねっ，セドリック叔父さん？」とノニーが言った．

階段を下りながら，セドリックは独りごちた．「なんとか絵のコツがつかめそうだ．それをまとめ上げるのは難しい，物凄く難しい．だが僕はきっと出来る．どうか神よ，我に相応しい絵筆を選ばせたまえ，また相応しい選択をなさしめたまえ！」

翌日，彼は，ノニーと布団の上でチェッカーをすることに成功した．彼が手を考え込んでいると，彼女が訊いてきた．叔父さんは，あの花や小鳥や川へ飛び込む女の人をどこへ隠しているの？」

「裏返しにして壁にかけるのさ」と彼は言った．「そうすれば誰にも見えない．でも，それでも当然それらはそこに存在するんだよ」

彼にはわかった，ノニーのこのたびの深々とした沈黙の原因が共感不足ではなく，セドリックと自分との新しい相互理解を言い表す言葉を見つけあぐねている状況だということが．やっと彼女が口を開いた．「ビリーとあたしの馬は，ブースに居るわ．厩舎のよ」

「そうだよね，沢山のほんとうに素晴らしい馬がね」と彼は言った．

彼女が彼に勝ち，彼がコマを小箱に仕舞っていると，彼女が突然尋ねた．「あたしの馬，見せたげるわ，セドリック叔父さん」

「そうか，それは嬉しいな」彼は言った．「楽しいだろうな．馬のこと，ずっと思っていたんだ．きちんと櫛をかけたり，水をやらないと可哀想だよ，ビリーはもういないし，君の足は悪くて馬のところまで上って行けないし」

「足は全然大丈夫よ」とノニーは言って，ベッドの上にすっくと立ち上がった．

「馬の世話をするには，強く丈夫な足を持っていないとね」と彼は言った．「そういう足を，ビリーの兄さんは持っていたと思うよ．とにかく明日にも行ってみよう」

「だめ，今日よ」とノニー，「お昼ご飯のあとにね」

彼女は，あたりを見回して，つけ加えた．「アンダソンさんやブラウンさんが知ったら困るわ」

「そうだね」と彼は言った．

「イングリッドが服を着せてくれるわ」と彼女．

「イングリッドが君に服を着せてくれるんだね」と彼は同意した．「じゃあ僕はアンダソンさんとブラウンさんに，君が僕とドライブに行くと説明することに

しよう」

彼女が可愛いフランネルの夜着でベッドの上に立つと，彼女の顔が彼の顔の高さになった．なんと澄んだ，深くて，純真な瞳だろう，なんと美しく引かれた眉毛，なんと長くて濃い睫毛だろう，と彼は思った．この軽げな姿形の中に突如としてこんな不思議な力と重みが宿ったとは，と．

「絶対に，絶対に，絶対に，誰にも言っちゃだめよ」と彼女はゆっくりとした口調で重々しく言った．

「絶対に，絶対に，絶対に，誰にも言わないよ」彼は全く同じようにゆっくりと重々しく繰り返した．

彼女は，探るように彼の目を覗き込んだ．まだほんの数年にしかならない彼女の人生は失望と破滅に満ちていた．彼女には危険を冒す余裕がなかった．彼は，自分を無条件に縛る誓いの言葉を探した．

「もし僕が一言でも馬やブースや厩舎のことを世の他人に漏らしたら，アラステア・アダムズ以上の絵は描けなくなることに甘んじます！」──アラステア・アダムズは，彼の絵の先生だった──「アーメン！」

彼は，共謀者と計画をチェックして，こう取り決めた．アンダソン嬢には休みをとってもらい，イングリッドにはブラウン嬢を監視してもらう，と．

それは，見事に澄み切った静かな 8 月の午後だった．ツゲの垣根や長くのびるアラセイトウの花壇の上に漂う空気は清々しく，大きなプラタナスは芝生に穏やかな影を投げかけていた．ノニーは，セドリックの腕に抱かれて，周囲を見回した．彼は思った．子供には，正しい時間の観念が持てるものだろうか，と．──最後に庭に出てから，どれほど長い時間が経ったのか，そしてどれほど多くのことが起こったのか，彼女にはわかるのだろうか．

「レスターは遠ざけたからね」とガレージへと向かいながら彼は話した．「僕らはピーヴィー夫人のところへ向かっているよ」ノニーは，セドリックがどうしてその行き方を知るようになったのか，聞きたげに彼を見つめた．だが何も言わなかった．

階段で彼は考えた．「人は，この擦り減った古い階段の一歩ごとに 10 年という時間を遡るのだ」と．彼は，階段を数え，自分がまさにゾファニーの時代へ後戻りしたと思ったそのときピーヴィー夫人の玄関口に辿り着いた．

白のカーテンがかかり，ゼラニウムの鉢が置かれた窓辺で，客人を目にした小さな老婦人は椅子から立ち上がろうとしていたが，あきらめ，そのために夫人がさらに小さくなったように見えた．夫人は静かに静かに嗚咽し始めた．ノニーは，彼女に優しい，親しみのこもった眼差しを送ったが，会話を始めようとはしなかった．

「どうぞ，お座りになったままで，ピーヴィー夫人」セドリックは言った.「ノニーは，ご覧のようにまた元気になりましたよ．あなたの方はいかがですか？ちょっとだけ馬具部屋へお邪魔したいのですが」

「ああ，たしか馬具部屋はものすごい埃ですよ」ピーヴィー夫人は言った.「あたしゃ，可愛い孫が逝ってからは足を入れておりませんよ．あたしには，可愛い孫がいたんですよ，セドリックさん」

「ええ，存じています，心からお悔やみしますよ，ピーヴィー夫人」とセドリック.「埃のことは気になさらなくて結構ですよ」

「ビリーは，鍵を持ってきて」とノニーが言った.「それで錠を開けたの．中に入ったら，私，床に立てるわ，セドリック叔父さん」

セドリックは，馬具部屋の扉を開けた．中の匂いが光より先に彼を打った．そのうち，匂いと光が一つに溶け合い，穏やかで好ましくも恭しい歓迎となった．

馬具部屋は，建物全体を縦に貫く大きな天井の低い部屋で，東向きの窓が三つと西向きの窓が三つあった．部屋の中のものはみな，恐ろしいほど埃に覆われていた．彼は，ローマ古代都市のポンペイやヘルクラネウムを思い描いた．ビリーの死後この部屋には入ったことがないという老夫人の言葉は，たしかにその言葉以上に正しかった．その見事に濃密な埃の層は，老御者の時代へと遡るものに違いなかった．分厚い蜘蛛の巣が，部屋の隅々まで，古びて黄色っぽくなった小さな窓ガラスの上に張りめぐらされていた．

この放置されていた部屋があまりにも見事だったので，青年は一瞬何のためにここに来ているのかを忘れてしまい，子供を下ろすとしばらく完全に黙して佇んだ．午後の陽光は，黄金色に満ち，剥き出しと貧しさを王の壮麗にまで高めていた．石灰塗りの白壁は，大理石のごとく半透明に光り，天井の梁は銅色の艶を呈していた．影に潜むものさえ，海底の宝物のように年月を経た琥珀の多彩な色調で妖しげに燃えていた．

二つの壁は，その全体が釘と掛け金で覆われており，そこにはあらゆる種類の馬具が吊り下げられていた．胸懸（むながい），腹帯（はらび），面懸（おもがい），轡（くつわ），鞍敷き，鐙（あぶみ）があった．一頭立て馬車用，二頭立て馬車用，二頭縦繋ぎ馬車用，四頭立て馬車用の，目隠し革に王冠を押した真鍮または銀細工の馬具があった．狩猟用の鞍，競走用の鞍，婦人用の鞍．部屋に漂う秋の茸のような鼻をつく黴くさい臭いは，すべてこの古い革製品の最奥にある本質にほかならなかった．

セドリックには，馬具職人のわざについての知識は乏しかったし，今まで馬に牽かせた馬車に乗った憶えもなかった．彼は，馬具類や鞍類をじっくりと眺めていて，それらが今は黴に覆われ，ひび入っているが，かつては選び抜かれた革と金属で作られた素晴らしい仕事の賜物であったことを知った．老練で，慎重で，

そして忍耐強い手が持ち上げ，回して作り上げたのだ．真剣で，価値のわかる目が，仕事の始まる前に，一切のものが作られるべき唯一の革を選び出し，長い仕事の終わりには，欠点のない各部分が一つの欠点無き全体へと集約されるのを目にしたのだ，── 彼ら老馬具職人たちは，心にチクリとかすかな痛みを覚え，出来上がった作品を荷造りして発送した．

別の二つの壁には，ガラス・額縁付の絵が列をなして掛かっていた．それらは例外なく，馬を描いたものだった．一頭ずつ，あるいは二頭で，あるいは群れで描かれていたり，また手綱を引かれていたり，疾走していたり，障害物を見事な跳躍で越えていたりする誇らしげなポーズのもの，さらには四輪馬車の前で威張っていたり，二頭四輪馬車の前で軽く踊っていたりするものがあり，あるいはまた赤の燕尾服の紳士と裾をうしろへ地を掃くほど長く垂らしたご婦人と共に描かれているものがあった．これら古びた版画は，ここの他のものと同様に極限まで美しく注意深く制作されていたが，他のものと同様に色褪せてハエの糞のシミが付着していた．いくつかの版画では，ガラスにひびが入っていたり，粉々になっていたり，完全に脱落したりしていた．

ここにビリーの王国があったのだ，とセドリックは思った．

ここに，馬を思い，馬を語ることに没頭していた人間が，馬について知れるかぎりのことを知っていた人間が，そしてその最大の満足と最高の人生目標が何らかの形で馬と結びついていた人間が，暮らしていたのだ，と．調教師の息子にして御者の孫たるビリー，乗馬者と馬の飼育者の千年に及ぶ長い歴史における最後の末裔としてのビリーこそ，この英国の古いが遠からず消えて忘れられるであろう馬の世界の正当な相続人だった．馬の世界の人里離れた聖域の若い無口な番人・守衛として，彼はその馬の世界を自分の遊び仲間，すなわち自動車時代の子供の目の前に，力強く生き生きと蘇らせることが出来たのだった．

ノニーは，セドリック本人と同様に静かに佇み，情熱的で優しげな誇りを秘めてあたりを見回していた．また再び彼女は抱え上げてもらい，客人と共に絵を眺めようとした．彼女が彼の肩に乗れるくらい元気になっていると意見の一致を見た二人は，その場の精神につながれるまま，この画廊に見入った．

「ほら，これ，セドリック叔父さん」とノニーは嬉しそうに叫んだ，「ロンシャンを勝った“レインジャー”よ！ これはアスコットを勝った“ボイヤー”だわ．あの鬣（たてがみ）のついた惚れ惚れするような白馬がヴィクトリア女王ご自身の乗馬，そして後ろ足で立ち上がっている栗毛がアルバート王子のだわ．これは，セントレジャーを勝った“ロバート・ザ・デヴィル”よ．── ほんとの悪魔に似てるでしょ？ ──そしてこれがダービーを勝った“グラジエーター”だわ．みんな，絵の下に書いてあるでしょ」

「でも，君は字が読めないんだろ，ノニー」とセドリックは言った.「これみな，どうしてわかったんだ？」

「ビリーは読めたわ」とノニー.「彼が全部あたしに説明してくれたの」

「ほら，見て !」と彼女が，名誉ある位置に一つながらに架かっている長大な鋼板版画を指さしながら，急に感極まったように甲高い声で叫んだ.「1838 年 6 月 28 日のヴィクトリア女王陛下の戴冠式の絵よ !」

もう一度下ろしてちょうだい，セドリック叔父さん」と彼女は言った.「女王様の戴冠式の行列ごっこをしましょうよ，叔父さんとあたしで」.

セドリックは，あたりを見回した．どこにも衣装ダンスや長持は見当たらず，ただ洗濯バサミの入った籠と空のガラス瓶が御者の部屋から馬具部屋へ持ち出されてあった.

彼は思った，自分は子供の世界の真ん中へと到達したのだ，と ── 今彼は大きな無人の床に立ち，大人になったことの悲しみを痛感していた．ずっと昔に死んだ馬の装飾品のどれがビリーの魔法の杖で称揚鼓舞されて王室の戴冠式の行列に参入出来たのだろうか？

窓から入り込む陽光の真ん中に，擦り切れた馬の毛のカバーから巻き毛がはみ出た肘付の安楽椅子が一つ置かれていた.「ほら，さてと，ノニー」彼は言った「君をこの椅子に坐らせてあげよう，君は僕がすべきことをただ言いつければいいんだよ」

「いやよ」ノニーが言った.「あたし，椅子には坐らない」

「どうしてだい？」彼は尋ねた.「もしダービーごっこをするのなら，この椅子が審判官席だし，君が審判官になれる．またもし戴冠式行列ごっこなら…」と彼は言葉を中断した．彼女が何になったらいいのか完全には確信が持てなかったから.

「それなら，あたしは神様」ノニーははっきりと威厳を見せて宣言した.「そう，あたしは行列を上から見下ろす神様なのよ．神様は，つまりすべての馬を上からご覧になる．ビリーはそう言ったわ」

彼女はその大きな椅子に坐ると，とても小さく見えたが，玉座についたかのように，背筋を伸ばして誇らしげに腰を下ろし，躊躇することなく命令を発した.

「厩舎の扉を開きなさい」とノニーは命じた.「そして馬たちに床を速足で駆けさせなさい」

「かしこまりました」とセドリックは言った．彼は彼女の目線を追おうとして，当てずっぽうに壁から一枚の絵を下ろした.

「違うわ，“オーモンド”じゃない，セドリック叔父さん」ノニーが叫んだ.「もう一頭の方の“ズードン”よ．その馬は，他のすべての馬の大祖父さんよ」

ずうっと右の方，“ズードン”は背に鬘（かつら）をつけた勇ましい騎手を乗せて後ろ足で勢いよく立ち上がっていた．

「あなたは自分では絶対に厩舎を見つけられないでしょ，セドリック叔父さん？」とノニーが尋ねた．「でも，ビリーは見つけられたわ．彼は，それがここにあることを知っていたの，そしてついに見つけたのよ．彼は，厩舎の扉に手をかけるために，掛け金に架かっていた婦人用の鞍の上に立たなければならなかったの」

“ズードン”の絵が留め金から取り外されると，そのうしろの壁に四角い穴が開いた．穴は，暗くて深そうだった．

「その中に，彼らがいるのよ」とノニーが言った．

その薄暗い部屋に，大小の箱の山が置かれてあった．彼は，それを一つひとつ取り出していたが，最初の３つか４つを持ち出してきたとき，両手に抱えているものが何なのか感づき始めた．

これらの箱は部屋と家具に見事に調和し ── モロッコ革，スエード，ベルベットで出来ており，金文字と金の締め金が施されていた ── それは過ぎ去った日の優雅が刻まれているものだったが，今は哀れにも壊され，黴が生え，ひび割れていた．彼は，厩舎を空にして，ブース箱を床に綺麗に並べ，それから開けるようにと命じられた．底や蓋の絹の内張りは，ところどころ破れていたが，脆くて半分溶けたような素材の上で，宝石が永遠に瞬く星の輝きのごとく光っていた．

ノニーは，箱から叔父へと目を移して，彼の顔に表われている驚きと感動に満足した．

「今まで，光り輝く馬を見たことがある，セドリック叔父さん？」と彼女が訊いた．「ビリーとあたしは，小さなスポンジとブラシ，それにビリーのお祖父さんのセーム皮で，馬たちに櫛をかけたのよ．ビリーのお祖父さんは言ったわ，世界に光り輝く馬ほど美しいものはないって．女王様の乗馬に似た白い馬たちを見れば，目をかけられ，水を貰い，良い栄養状態にあることがわかるって」

ダイヤモンドやエメラルド，ルビー，サファイアの指輪があった，ブーケや花かごの形をしたブローチ，唐草模様や星をあしらったブローチがあった，ブレスレットやイヤリング，靴の止め金もあった．５つの箱には，ネックレスその他の大きめの装身具が入っていたが，それらの宝石はどうしたものか台座から外されて，ばらばらの小さな山となって転がっていた．２連の真珠のネックレスの紐は，── 一本は非常に長く，もう一本は短いが，その代わり異常に大きな同じ形の微かに赤みがかった真珠が繋がっていた ── 引きちぎられていたり，ぼろぼろに崩れており，真珠は箱が上げたり下ろしたりされたために，浜辺の砂のように，お互いに極めて穏やかに転がったり，押し合ったりしていた．真珠やダイヤモンドや色石の長くて重いイヤリングもあった．３つの煌めくティアラがあった，最大

のものは全体にダイヤモンドがあしらわれていた.

よく磨かれた宝石の光沢と真珠の幽かに秘密めいた輝きは，芸術家の心を深い敬虔の念と，この世の美しきものに対する素朴で謙虚な感謝の念で満たした．セドリックは，長いこと物思いの中に我を忘れて佇んでいたが，最も美しい装飾品としてこれ，また，あれと選んでいった.

しばしののち彼は思った.「そうか，それでわかったぞ，そうだったのか！ 神お一人がご存じなのだ，実際にここで何が起こったのかを！ 二人の恋人たちは，慎重に出奔の準備をしたあと，夫の報復を避けるために最後の瞬間には大慌てに姿を消したに違いないのでは？ あるいは，ひょっとしたら二人は，馬丁の少年に密告されて，予想だにしていないときに高祖父のジョージが二人に不意打ちを食らわせたのかも？ とすると，もし僕が徹底的な調査に乗り出したら，床板の下に骸骨を発見するという理屈もあり得るのではないか？」

ノニーは，彼に二，三分考える時間を与えてから，仕事を始めるようにと命じた.

彼は，従順に王室のパレードの隊列を整えるために四つん這いになった．戴冠式の行列は，この隅からノニーが坐る椅子まで行進することになる．まずは先鋒を整えることから始められた．行列が彼の手で形成されるに従って，それはますます感動的なものになっていった── 女王の乗られる四輪馬車が行列の最後尾に姿を現したのだ.

パレード全体の先頭，全員の者の前では，ウェストミンスターの高官リー氏が騎乗していた．リー氏は家紋の装飾が施され，金と瑪瑙（めのう）でできた大きな高さのある印台指輪だった．彼は，馬上に棒立ちになって，威風堂々と振る舞った.

そこへ近衛兵からなる威勢の良い騎兵中隊がやって来た．ネックレスからとれた小さな方のルビーの列だ.

そのあとへ王室の馬車が続いた. 重々しい金とダイヤモンドのブレスレットで，その鼻息荒い一連の馬は 4 つの指輪だ．その列の最後，皇太后の四輪馬車は，6 個のダイヤモンドの指輪に牽かれるティアラで，皇太后自身はティアラの内曲がりに向かって優美に寄りかかるとても大きな丸々とした真珠だ.

王室の馬車の次には，騎乗楽隊が続いた ── あらゆる色と形のブローチの.

そして今ネックレスから外れた丸い薔薇色の真珠が行進してきた．これは女王の 48 人の選抜された海軍兵曹長たちだった.

そのすぐあとに女王の近衛兵の騎兵中隊が現われた．これは最初の近衛兵の騎兵隊より堂々としており，ルビーも大きかったが，馬たちを統御するのに苦労していた.

その後は，緑の衣裳の王室の追撃兵で，生粋のエメラルド.

白馬の護衛官は，ダイヤモンド．

そしていよいよ女王陛下の四輪馬車のお出ましだ！ ごらん，6 対のドロップイヤリングのうしろにあるこの大きな光り輝くティアラを．イヤリングを凌駕する栄誉は言うまでもない．イヤリングの一番軽い対は先頭に，一番重々しい対は馬車に最も近いところに置かれている．

「さあ，ヴィクトリア女王を馬車に乗せて！」ノニーが大声で言った．「女王さま，白づくめの衣裳でなんて魅力的なこと!」

とりわけ注意を払いながら，セドリックはヴィクトリア女王をティアラの半円の中へ置いた．丁度この瞬間，彼は思い出した．子供の頃話に聴いた大きなダイヤモンドのことを．なんでもそのダイヤモンドは 200 年前，憶えているかぎりでは，空想的でいささか疑わしい状況だが，マハラジャの宝物庫から手に入れたものだということだった．

女王の四輪馬車のあとには最後の連隊，長いネックレスの真珠，が粛々と進んだ．

「立ち上がるのよ，セドリック叔父さん」ノニーが言った．「行列を見て．人々がみな万歳を叫んでいる．進むあいだ中，彼らは“女王陛下万歳”を歌っているわ」

彼は立ち上がり，ズボンの埃を払おうとして，それを止め，行列に満腔の敬意を捧げた．

しばらく経って，彼とノニーの目が行列の上で交差した．少女の顔は穏やかに明るく，幸せに赤らみ，愛らしくてほぼ完璧で，どこか神的な雰囲気を漂わせた子供の顔だった．

「この行列について何か言って，セドリック叔父さん」と彼女．

「アラジンの洞窟みたいだね，ノニー」と彼．

その言葉がドーヴァーのホテルでの昼食とアナベルの顔をよみがえらせた．彼の心は重苦しくなった．「ブレスレットに嵌めたオランダの大きなルビー」彼は，ゆるゆると考えた．「たった一つのルビー．それとここにあるこのすべて．しかも，彼女所有の馬具部屋にあるこのすべて！ ああ，アナベル！ ああ，アナベル姉さん！」

「ちがうわ，セドリック叔父さん」ノニーが怒ったように叫んだ．「アラジンの洞窟に似ているだなんて言ってはだめよ，これは女王陛下の戴冠式の行列なんだから」

「違わないよ，そう言っていいと思うよ，ノニー」とセドリックは考え考えするようにゆっくりと言った．「そう，その通りだよ．これは女王陛下の戴冠式の行列だからね．でも，ちょっとアラジンの洞窟に似ていると思いつく人もいるんじゃないかな」

「まあ，そうね」とノニー.

そしてすぐ，ため息.

「あたし，いつも母屋に戻らないといけないでしょ，セドリック叔父さん」と彼女は言った.「だから，叔父さんには宝石を全部厩舎のブースに戻して,“ズードン”を前に掛けてもらわなきゃ.“ズードン”がすべてを護れるようにね．そうしたら，叔父さんとあたし以外は世界で誰一人見つけられないでしょ」.

「わかった，全部元に戻すよ，ノニー」と彼は言った.

「それに，なんだか」彼は一呼吸おいてつけ加えた,「まるでビリーがここに居るような気がしてくるんだが，そう思わないかい？」

彼女は，セドリックの言ったことをちょっと考えていた.

「ううん」彼女は言った.「ううん，その通りじゃないわね．でも，そう遠くないうちに── 」彼女はそこで言葉を切った.

「そう遠くないうちに」と彼女は繰り返した．しっかりと，はっきりした声で，そして思慮深く，目を輝かせながら彼を見つめて.「あたしがすっかり元気になれば．そうしたらビリーがやって来るのよ．それでビリーとあたしはもう一度いっしょよ ── ずっとね !」